

# 佐賀県総合運動場等整備に係る基本設計プロポーザル 選定結果及び審査講評

平成 30 年 3 月 21 日

## 佐賀県総合運動場等整備基本設計候補者選定委員会

委員長	倉田 直道（工学院大学名誉教授）
委員	上林 功（株式会社スポーツファシリティ研究所代表取締役）
委員	坂井 文（東京都市大学都市生活学部教授）
委員	原田 宗彦（早稲田大学スポーツ科学学術院教授）
委員	松尾 清美（佐賀大学大学院医学系研究科准教授）
委員	三島 伸雄（佐賀大学大学院工学系研究科教授）
委員	村林 裕（慶應義塾大学政策・メディア研究科教授）
委員	保井 美樹（法政大学現代福祉学部教授）
委員	山下 真輝（株式会社 J T B 日本版 DMO サポート室室長）
委員	白井 誠（佐賀県文化・スポーツ交流局長）

## 1 選定結果

最優秀者（基本設計候補者） 梓・石橋・三原設計共同企業体

次点者（次点基本設計候補者） 石本・平野・はたせ設計共同企業体

## 2 プロポーザルの経過

平成 29 年

12月25日 第1回選定委員会

参加資格要件、評価要領、技術提案を求める特定テーマ等について協議

平成 30 年

1月 5日 公告

1月30日 参加表明提出書等の受付期限

[参加表明者] 4者

- 2月 6日 技術提案書提出者の選定通知  
[ 選定者 ] 4者
- 2月 7日 技術提案書の受付開始
- 2月 9日 質問の受付期限（技術提案書関係）  
3者から10項目について質問が提出
- 2月28日 技術提案書の受付期限  
[ 技術提案書提出者 ] 4者
- 3月 9日 第2回選定委員会  
現地視察を実施  
ヒアリング及び審査方法等について協議
- 3月21日 第3回選定委員会  
技術提案書提出者4者による公開プレゼンテーション及びヒアリングを実施（会場：ホテルニューオータニ佐賀 鳳凰の間、傍聴者：24名）  
各提案者の技術提案書、プレゼンテーション及びヒアリングについて議論を行い、厳正な審査を行った結果、最優秀者（基本設計候補者）及び次点者（次点基本設計候補者）を以下のとおり選定
- ・最優秀者 梓・石橋・三原設計共同企業体
  - ・次点者 石本・平野・はたせ設計共同企業体

#### 【審査経過】

##### 第1回投票（各委員 2者に投票）

提案者	A者	B者	C者	D者
得票数	9	7	2	2

第1回投票の結果、1位のA者及び2位であり過半数の委員が投票したB者で第2回投票を実施

##### 第2回投票（各委員 1者に投票）

提案者	A者	B者
得票数	7	3

投票の結果、最も得票数の多かったA者を最優秀者とする  
ことについて協議を行い、A者を最優秀者、B者を次点者に  
選定

### 3 審査講評

#### はじめに

佐賀県では、平成29年3月に「佐賀県総合運動場等整備基本計画」を策定し、2023年に47年ぶりに開催される国民体育大会、全国障害者スポーツ大会において、アスリートがベストパフォーマンスを発揮できるような施設の整備はもちろんのこと、この大会を一過性のイベントに終わらせることなく、地域の活力を生み出す象徴となるべき場所を創出するための機会と捉え、単に個々の施設に必要な機能を整備するという視点だけでなく、今後、長きにわたり、夢や感動を生み出す県内スポーツの一大拠点として新たに生まれ変わらせることを目指している。

また、スポーツだけの利用にとどまらず、コンサートや展示会などの様々な活動を通じて都市の魅力を創出し、街の活性化に繋がる拠点となる施設を整備し、「さが躍動」の象徴的なエリアとして、県民に広く親しまれ、暮らしの中に溶け込むことで、スポーツをしない人たちも楽しんでいただけるような「憩い・賑わう」空間づくりを目指している。

更に、施設の整備にあたっては、誰もが使い勝手がよく、20年後、30年後を見据えた機能を兼ね備え、維持管理等に要するランニングコストも考慮した合理的な設計となるような配慮を要する。

基本設計候補者の選定に当たっては、このような県の方針、視点をもとに、多様な主体が設計の段階から参画し、地方都市における総合運動施設のこれからのあり方というものも見据えた上で、新しい「佐賀県総合運動場等エリア」を、県民、市民と一緒に創り上げていく設計者を選定することが重要となる。

このため、広く公募により技術提案を求め、提案内容及びプレゼンテーション、ヒアリング等によりその能力・適格性を総合的に審査し、今回の設計業務に最も適した設計者の選定を行うこととした。

審査は、提出された技術提案書に記載された業務の実施方針、設計コンセプト、5つの特定テーマに対する提案内容を確認し、提案内容の的確性、実現性、創造性について、委員による議論を行いながら進めた。

提出された提案書には、具体的な計画案を示した提案がある一方、特に地域にとってこの施設がどうあるべきかのビジョンを示した提案書もあり、ヒアリング等の結果を踏まえ、その実現性や的確性について審査を進めた。

また、今回の事業では、運営計画などは設計と同時並行で進めていくこととされていることから、運営事業者や運営形態がはっきりとは見えない中で、今後の設計に運営の視点をどのように取り入れていくかという点も選定のポイントとなった。

公開プレゼンテーション及びヒアリングでは、提案者によるプレゼンテーションによ

り、その提案内容や考え方について確認するとともに、提出された技術提案書やプレゼンテーションでは不明確だった点や疑問点について質疑により確認した。

これらの厳正な審議の結果、豊富な業務実績と経験に基づいており非常にバランスのとれた提案である点や、地元の関係者の強い意欲が提案に盛り込まれた点が評価のポイントとなり、選定委員会として、佐賀県総合運動場等整備に係る基本設計を担う設計者に最も適した者に、梓・石橋・三原設計共同企業体を選定することとした。

選定された設計者には、プロポーザルで評価された点を活かすとともに、今後設計の過程で様々な関係者などから寄せられるであろう意見や要望に真摯に向き合い、「さが躍動」のシンボルとなり、県民に広く親しまれ、暮らしの中に溶け込むことで、スポーツをしない人たちも楽しんでいただけるような「憩い・賑わう」空間づくりの実現に向けて努力いただきたい。

以下に各者の技術提案について委員会で交わされた議論の概要をまとめる。

#### 【最優秀者】

梓・石橋・三原設計共同企業体

豊富な業務実績と経験に基づいており、施設設計としては、全体としてバランスのとれた提案であると多くの委員から評価された。

設計検討の体制及びプロセスについても、実施手順を丁寧に検討しており、市民ワークショップの提案など、地元の事情を含めた具体的な検討がなされている点は特筆すべきものがある。また、佐賀の地元産材の採用など、ローカルな資源に目を向ける一方で、世界レベルのスポーツ専門家を交えた施設づくりを提案している点は評価できる。

アリーナのデザインは、イベント時における機能的な配慮はなされているものの、内部空間及び外観ともに一般的な提案に留まっており特徴がない。今後、佐賀県におけるスポーツの聖地に相応しい、象徴となるようなデザインを期待したい。一方で、佐賀市の都市構造に配慮した提案、道路に向けた顔づくり、公園としての開かれた空間づくりなどは大変魅力的であった。

業務に対する積極的な取組姿勢が示されており、佐賀のあり方や地域性に対する調査・分析が優れている点や、地元関係者との協力体制については評価できる。本施設の整備による地域まちづくりへの波及については具体的で説得力がある一方で、多布施ウォーク、賑わいストリートなど空間は表示されているものの、そこでどのような活動が生まれ、賑わいに繋がるのかについては不明である。このため、今後、提案を具体化し

ていくには、地元のまちづくりの専門家がしっかりと関わっていくことが望まれる。

なお、本プロジェクトが成功できるか否かは運営体制によるところが大きいと思われるが、その点には触れておらず、地方都市におけるアリーナの将来の可能性や施設運営の課題に対する問題意識が乏しいのが残念なところである。

今後は、運営という視点から様々なインプットを入れながら、実現に向けて取り組んでいただきたい。

## 【次点者】

石本・平野・はたせ設計共同企業体

豊富な業務実績と経験に基づき、アリーナ内部の活動の見える化を意図しており、アリーナ施設としてデザイン的には優れた提案である。音楽関係者の意見を聴きながら提案を行っている点や、可変的で多目的に活用できる工夫など、シアター型アリーナに対する意欲的な提案は、複数の委員から評価された。

一方で、賑わいの創出についてはデッキ上に集中しており、スポーツパークとして、大規模イベント開催時以外の施設利用のイメージが乏しく、また、公園とまちとつなぐエッジ、駅までの動線等に関する設計コンセプトなど、地域のまちづくりへの波及などの意識が乏しいのが残念であった。

目配よく様々なステークホルダーや専門家との協業体制が提案されており、また、高稼働率のアリーナの実現のために、運営管理者との連携を図るという方針は評価できるものであったが、それらについての具体的な提案が少なく、求められていることへの受身的な対応と受け取れる部分もある点は物足りなさを感じた。

## 【C者】

スポーツ遊園地という、アリーナを中心とした地方都市における複合運動施設の将来のあり方を、具体的な施設も示しつつ提案しており、複数の委員から高く評価された。イベント時だけでなく平常時の「あそび」を重視している点についても評価されたものの、こども＝あそびに焦点を当て過ぎており、その他の世代に対する配慮が乏しい点が残念であった。

デッキ上には賑わい空間として様々な広場的なスペースが確保されている一方で、地上部は施設以外の敷地外部空間の殆どが駐車場に占有されており、周辺地域との繋がりが薄く地域への波及がイメージしにくかった。

特徴的な設計とそれを支えながらスポーツ施設の運営、まちづくり等を進める体制づ

くりの提案は評価できるものであったが、業務の実施手順には触れられておらず、業務量の把握についても不明であった。

なお、コストの低減に触れているのは本提案者のみであり、とかくコストオーバーになりがちな大施設の建設であることを考えると評価できる点であった。

## 【D者】

健康なライフスタイルの拠点としてのスポーツパークという地方都市における複合運動施設の将来のあり方（理念）を示した提案は評価できるものであった。また、敷地全体に対して、空間構成として憩いの軸、賑わいの軸、交流の軸を設定しており、イベント時以外の日常時における利用のイメージが示されている点も評価できる。

理念やコンセプトの提案力は評価できる一方で、提案がやや壮大であり、それを具体化するための運営体制やプロセスについては現実的な提案が乏しく、説得力に欠ける面が見られた。

本整備事業における中心的な設計対象であるアリーナについては、利用イメージとそれに応えた設計レベルの具体的な提案がなく、一般的なものであった。

施設を作りっぱなしにするのではなく、適切な運営体制への移行について具体的な提案があった点や、業務の実施手順や体制も提示されている点は評価できたが、佐賀県の実態に対する分析が十分でない点や、体制や業務手順の中で市民や地元ステークホルダーとの関係に触れていない点が残念であった。

## 【付記】

今回の基本設計プロポーザルに際して、最優秀者及び県に対して、各委員から以下のような意見もあった。今後、基本設計を進めていく上での参考としていただきたい。

- エリア内にスポーツの技術レベルを上げるための合宿施設が必要。障がい者にも配慮し、合宿ができるような宿泊施設をぜひつくっていただきたい。
- パラスリートの聖地という形で佐賀県をブランディングしていくというのも大いにありだと思っている。今日をスタートとしてさらに計画を進めていただきたい。
- 何かしら中の活動が透けて見えるような、ガラスにするということではなく、いろいろな意味で外に中の賑わいがしみ出るような建築なり施設にしていきたい。
- プロポーザル参加された地元の方には各委員も注目していたことから、ぜひ最後まで関わっていただきたい。文化イベントのようなものは、初動期はお金もつかず、手弁当

のようこともあると思うが、そういったところを乗り越えて、より多くのイベントが持続可能となるようなシステムづくりをやっていける人の繋がりをつくってほしい。

- スポーツのポテンシャルのあるのが佐賀だと思っている。スポーツコミッションであったり、運営事業者であったり、利用者の観点での意見を取り入れながら、どんどん変えるぐらいの話をしていただいたほうがいいものができると思っている。
- 施設としての相互の関係性をどうつくっていくのかというのは、デザインの的にも重要だと思う。広場にしても、本当に活用したくなるようなものになるのかというのは、地域の人たちの意見や運営者の人の意見、また、地元の方々がそこでどういう活動を実際にやっているのかという実態も踏まえて展開して行ってほしい。
- 20年後、30年後を考えた賑わいのある施設というものをどういうふうにつくっていくのかというところを担当する方々が強い気持ちを持って進めていただきたいし、そういう意味で、みんなで佐賀を応援したい。
- 最優秀者の提案は、提供型というか、全て専門家たちで解いていきますという提案で、佐賀の市民の人々が自分事としてスポーツに関わっていこうというところに進んでいけるかどうかまだ見えない。デザインとともに、提供されたものではなく、みんなで作り出していくスポーツ文化というようなものをぜひストーリーとして考えて、実現してほしい。
- 大事なスタンスは、これを一つのまちづくりの起爆剤にしていこうという姿勢だと思う。九州の中の施設だというような志でぜひ発展していくことを願っている。
- 建物としても、中についても、設計という点ではまだちょっと中途半端な点があり、余り魅力のある施設になっていないという気がする。もう一度、様々なことを再考して案を詰めて行っていただきたい。
- 運営という視点が非常に大事になってくると思っているので、この後は、ぜひ運営という視点からいろんなインプットを入れながら、よりリアルなものにしていかないといけない。